

氏 名 りゅう ほう
劉 鵬

学位の種類 博士（経済学）

報告番号 甲第 1593 号

学位授与の日付 平成 28 年 3 月 22 日

学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当（課程博士）

学位論文題目

中国の農村開発と社会関係資本—富平公司与農家女の事例分析

論文審査委員（主査）	福岡大学	教授	姜 文源
（副査）	福岡大学	教授	山崎 好裕
	福岡大学	教授	藤本 浩明
	福岡大学	教授	木幡 伸二
	釜山大学	教授	金 希宰

論文要旨

本研究は社会関係資本について考察を行ってきた。これまでの社会関係資本に関する研究は主に人間関係（コネクション）から社会構造・社会制度、社会構造に埋め込まれた資源などの流れを整理してきた。これは、社会関係資本理論に関する議論の範囲が拡大されたことであるといえよう。また、本研究は社会関係資本の概念を中国の事例に応用し、中国の事例の特徴を明らかにしたうえで、中国の社会関係資本の役割を分析した。最後に、中国の農村開発、農村経済の発展のために、農村社会に既存する社会関係資本を活用した政策を提言した。本論文は主に以下4つの章から構成されている。

第1章は、まず、社会関係資本理論の展開に注目した。社会関係資本は主に開発経済学分野で議論されている。本章では、社会関係資本の先行研究をまとめ、社会関係資本の理論形成、理論の枠組みについて整理してきた。社会関係資本理論の発展に貢献した学者は Pierre Bourdieu、Jamse S.Coleman、Robert D.Putnam、Francis.Fukuyama、Nan Lin などの論者である。これらの論者による社会関係資本は、個人が持つ人間関係から社会構造・社会制度、社会ネットワークに埋め込まれた資源まで、議論の範囲が拡大されたことを明らかにした。また、社会関係資本は理論展開のなかで、さまざまな課題に直面している。たとえば、社会関係資本が「曖昧な概念」として議論された結果、社会的な取引効率向上や経済パフォーマンス維持などのことと関連をつけるときに、社会関係資本の具体的な分類や類型化が要求される。さらに、社会関係資本は成熟した理論ではなく、さまざまな問題点も指摘されている。これらの問題点は用語の未統一、指標化の困難さ、資本としての扱い方、負の側面などが挙げられる。とはいえ、社会関係資本の概念はすでに、日本政府や世界銀行などが政策的に使われている。この概念は学際的な研究に有効に使えるものとして意味がある。したがって、社会関係資本に関する研究は社会発展および経済繁栄にとって非常に重要なテーマとして研究する価値があると思われる。

第2章は、まず、Alesina and Ferrara(2000)の理論モデルを紹介し、理論分析のプロセスを解明した。Alesina and Ferrara モデルでは、社会関係資本は Social Group の参加である、ないし参加者数であると定義された。このモデルは主にアメリカの共同体における白人と黒人の Social Group への参加に関する考察である。本研究は理論モデルをシンプルに再構築し、黒人の参加率の増加によって白人の参加者数は減少し、社会関係資本は減少する可能性があるという結論を確認した。この結論は理論分析によって導かれるものだが、アメリカなどでは40年以上に続けられたアファーマティブアクションに反するものとなる可能性があるとして指摘しておきたい。また、既存モデルを解析したうえ

で、社会的正義 (Social Preference) を導入しモデルの拡張を行っている。それは、黒人の参加によって、社会的正義を重視する白人の効用が高められると仮定した。具体的に、モデルは、マイノリティーの黒人の参加率は増加するときに、社会的正義を重視する白人の効用が増加し、白人の Social Group への参加を促す可能性があり、Social Group への総参加者数は増える、社会関係資本が増える可能性を示唆している。さらに、経済学で用いるモデルとして、Alesina and Ferrara モデルは、“距離” というコスト概念を効用関数に入れて議論しているが、本研究は拡張したモデルで距離をコストとして扱っている。もう一点、モデルでは、選好関係がソーシャル・アイデンティティーにより完全に規定されているとする Alesina and Ferrara モデルの仮定を緩和し、白人のなかに黒人に対して排他的ではない選好 (Social Preference) を持つ人々がいるという仮定の修正を行っている。最後に、第 2 章での理論分析の結論としては、白人のなかに、社会的正義を重視する白人が多くなれば、つまり、社会の異質性を許容する姿勢をもつ白人が多くなれば、異質的な社会であっても、社会関係資本の蓄積にプラスの影響を与えることを明らかにした。

第 3 章の目的は社会関係資本の概念を用いて、中国のマイクロファイナンスの事例を分析することである。まず、中国におけるマイクロファイナンスの展開を概観し、その特徴について論じる。マイクロファイナンス実施機関 (以下 MFI とする) は、本来、無担保の小額融資を通して社会の貧困削減に貢献できる金融組織として注目されてきた。特に、バングラデシュのグラミン・モデルはその典型的事例である。グラミン・モデルは貧困対策として注目され、その功績を賞するために、グラミン銀行と創始者であるムハマド・ユヌス総裁には 2006 年のノーベル平和賞が授与された。中国では、NGO が中心となっていた初期の MFI は、マイクロファイナンスに関する法整備の遅れ、外部援助資金獲得の困難などで、その事業拡大に失敗したケースも多い。特に、NGO 活動に政府官僚組織が関与するなど、NGO が中心となる MFI はその活動領域を大きく広げることではできなかったことを明らかにした。また、2008 年の「關於小額貸款公司試点的指導意見」という政令によって、中国では小額貸款公司在数多く設立されることになる。さらには、NGO 活動として始まった MFI が小額貸款公司に組織轉換する動きもみられる。ここで、NGO 型 MFI と小額貸款公司的短所と長所を明らかにした。それは、NGO 型 MFI はグループ連帯保証の導入によって貧困削減に役に立つという長所と外部資金の過度な依存により財務上の持続可能性が低いという短所を持つ。それに対し、小額貸款公司是商業化資金の吸収によって財務上の持続可能性が高いという長所と、貧困農民を融資対象から外し、貧困削減には十分に役に立たないという短所を持つ。最後に、山西省永濟市の富平小額貸款公司的事例を考察した。富平公司是本社を

村に設置、貸付員の現地化、独自の審査基準、果物協会のネットワークを活用し、無担保で100%の返済率を維持できた。富平公司の事例は、中国農村の社会関係資本を効果的に活用したMFIの組織作りを示しているものと思われる。

第4章は、中国のNGO「農家女」の事例を取り上げて、社会関係資本の役割について論じた。まず、中国のNGOの現状について説明した。近年の経済発展および社会構造の転換によって、中国のNGOの登録件数は年々増えてきた。一般的なNGOの概念と中国のNGOの概念の相違点を明らかにしたうえで、中国のNGOは「二重管理体制」のもとに置かれ、官製NGOという特徴を持つ。草の根NGOはNGOとして民政部門で登録できず、工商部門で会社として登録する。草の根NGOは法律上NGOとして認められないという特徴も持っている、との2つの特徴を明らかにした。また、各省のNGOと社会関係資本について論じた。このなかで、NGOの組織の性質は社会関係資本の創出に役割を果たしていることを明らかにした。一般的に、NGOは社会関係資本を測定する1つの指標として論じるときに、その蓄積量は、経済成長率、教育水準、所得格差水準との相関関係が実証されている。しかし、中国の場合、このような相関関係はみられない。その理由として、中国のNGOが政府の関与および法律法令の制限の強さによるものであることが挙げられる。最後に、NGO「農家女」の事例を分析した。農家女は「上からのNGO」と「下からのNGO」という2つの部分が構成されることを明らかにした。1つのNGOのなかで、政府の指導を受ける「上からのNGO」と民間のネットワークを活用する「下からのNGO」をはっきり分けたことが成功につながる。そのなかで、組織拡大できたのは「下からのNGO」の部分である。組織拡大の要因は「下からのNGO」における民間資源の導入、および自発的な民間ネットワークの拡大・活用と呼ばれる社会関係資本が役割を大いに果たしていることである。

本研究は社会関係資本の概念に注目し、中国の経済発展に伴う農村の貧困対策の可能性として考えてきた。この研究でわかったのは、社会関係資本という概念を持って中国の事例に応用するとき、中国の特徴に合わせ論じる必要がある。中国は国土が広く、人口が多く存在し、各地域における風土人情、生活習慣、文化が違うため、社会関係資本の概念は中国の政治制度、歴史文化および社会情勢にすべて適応するわけではない。本研究では注目しているマイクロファイナンスの事例である山西省永済市の富平小額貸款公司やNGOの事例である「農家女」は、社会関係資本の概念を中国のことに応用する一例に過ぎないである。あくまでも個性的なものであって、中国の農村の貧困対策を論じるときに社会関係資本を用いてすべて説明できる理論ではないのを指摘しておきたい。中国の貧困削減に当たって、社会関係資本に関する研究はより幅広く考察することによって解明する必要がある。

中国の農村開発と社会関係資本—富平公司与農家女の事例分析

福岡大学経済学研究科博士課程後期 劉 鵬

この論文は、社会関係資本理論の展開、社会関係資本に関する理論分析、MFIにおける社会関係資本の役割、NGO から見た社会関係資本の機能、の4章から構成されている。

第1章では、Bourdieu からはじまり、Coleman、Putnam、Fukuyama、Nan Lin の社会関係資本に関する議論がまとめられた後、社会関係資本に関する様々な論点が要約されている。社会関係資本は、その概念に曖昧さは残るものの、すでに政策的に用いられている政策変数であること、そして学際的な研究に有効な概念であることが強調されている。

第2章は、Alesina と Ferrara の理論を紹介し、この理論の拡張を行っている。Alesina と Ferrara は、白人と黒人で構成される“異質性”の高い共同体において、minority、つまり黒人の人口増加は地域の社会関係資本を減少させる可能性があることを示した。この議論は、Paternalism の経済的効率性を証明しているものとして解釈できるかもしれないが、アメリカで40年以上続けられている公民権運動を否定している印象をも与える。経済学で用いるモデルとして、Alesina と Ferrara のモデルは、“距離”というコスト概念を効用関数に入れて議論しているが、劉君の拡張したモデルでは距離をコストとして扱っている。そして、もう一点、劉君のモデルでは、選好関係がソーシャルアイデンティティにより完全に規定されているとする Alesina と Ferrara の仮定を緩和し、たとえば、白人のなかに黒人に対して排他的ではない選好を持つ人々がいるという仮定の修正を行っている。

第2章のモデルは、2つの重要な結論に至っている。まず、1つは、Alesina と Ferrara の条件（比較的と同質的な共同体において、minority の数が増加した場合、社会関係資本が減少する可能性が高いという条件）は、劉君が提示している様々なモデルの修正の後にも、有効な条件として残るという点である。これは、Alesina と Ferrara の条件が、モデルの特定化に依存しない、一般的性質を持ったものであることを意味する。2つ目の主な結論は、自分とは異なるソーシャルアイデンティティに対して寛容な（排他的ではない）選好関係を持った人々が存在する共同体では、Alesina と Ferrara の命題は成立しない、というものである。

第2章で構築されたモデルは、公共経済学、産業組織論、スポーツの経済学

など幅広い分野に応用できるものである。これは、第 2 章のモデルが持つ以下の特徴による。まず、劉君のモデルは、市場の需要が個人の需要に影響を与えるというバンドワゴン効果を暗黙的に取り入れている。言い換えると、他人の行動、社会の影響が個人の選択に影響を与えるプロセスを、劉君のモデルを用いて分析することができる。これは、Alesina と Ferrara のモデルを完全同質的な共同体に応用したことで得られた、1 つの分析ツールでもある。もう 1 点、劉君のモデルは、距離をコストにしたことにより、ある商品や行為の shadow price が距離によって異なることになる。このモデルは、異なる経済主体の分析に有効で、経済学でよく用いられる方法論的個人主義の限界をも克服できる 1 つのテクニカルなツールになる。このような観点から、劉君は第 2 章のモデルを様々な分野に拡張して、数多くの論文を書いている。

第 3 章では、中国農村における MFI の事例として、富平公司に関する分析が行われている。中国の MFI は、NGO 型 MFI と商業化された MFI で分類されてきたが、NGO 型 MFI はその規模が縮小され、全般的に商業化される傾向が強い。本来、MFI とは農村の貧困削減を目標にし、貧困農民に対し無担保、低利子の貸付を行うものであるが、商業化された MFI はこのような機能を果たしていない。そのなか、富平公司は、農村の信頼、規範、ネットワークを効果的に活用して、貧困農民に無担保、低利子の貸付を維持しながらも事業を拡大させている。このような成功をもたらした制度的特徴として、劉君は従業員の現地化、そして農村に存在する既存の社会ネットワーク（果物協同組合など）を金融に活用したこと、をあげている。第 3 章のもとになっている、中国農村の金融組織に関する劉君の論文は、国内の査読付きジャーナルである“東アジアへの視点”に出版された。

第 4 章では、中国の NGO、農家女に関する分析が行われている。一般に、NGO 活動で図られた社会関係資本のストックは、経済成長率、所得配分、教育水準と相関関係が大きいことが知られている。しかし、中国の場合、このような相関関係はみられない。その理由として、劉君は、NGO 活動に対する政府の介入が強いことを挙げている。政府の介入が強い中国において、農家女が NGO 組織として大きな実績を残している理由として、劉君は、農家女の組織改編に注目した。NGO の組織のなか、政府が関与する部分（上からの NGO）と民間のネットワークで構成される部分（下からの NGO）の機能を分離したことが農家女の成功原因である。

以上が、劉君の学位論文の概要である。劉君は、中国の留学生のなかでも珍

しく農村出身の学生である。そして、劉君の研究目的は、中国農村の貧困問題を解決できる政策を提言していきたい、という 1 点に一貫している。この論文では、社会関係資本に関する理論分析に有用なモデルが提示されていて、さらには、中国農村の MFI や NGO に関する制度分析が行われている。劉君の MFI や NGO に関する制度分析は、国内の現代中国学会において高く評価された。そして、第 2 章の理論モデルは、その拡張・応用されたものを、海外のジャーナルに投稿している。全体的に、社会関係資本に関する理論、制度分析として、劉君の研究は非常に高く評価できると思われる。